

地域金融システムの分析

期待される地域経済活性化への貢献

■ 岩佐 代市 編著

■ 中央経済社

評者

東洋大学経営学部会計ファイナンス学科教授
宮村 健一郎



本書は5人の優秀な金融分野研究者による地域金融のタイムリーな話題に関する研究書兼概説書である。全10章から構成されているが、難易度は各章によって異なる。制度の説明部分は概説書的で読みやすく、初心者向けである。アカデミックな分析部分については、一般の読者には読みにくいところがあるかもしれない。しかし、経済・経営系学部で勉強した読者であれば理解することは十分可能であるし、金融業分析を専門領域とする学者がどのような方法や考え方で金融業を分析するのか、特に、どのようにして知りたいことを隠している覆いを取り外すのか、ということについてよく理解できると思う。

まず、第1章をみると、地域ごとの経済状況の違い、大企業と中小企業の経済状況の違い、金融機関業態別貸出残高の動き、リレーションシップバンキングの説明、中小企業に対する最近の新しい貸出手法などが、わかりやすい図を用いて説明されており、この先を読み進む準備として役立つと思われる。次に第2章は、地域別、金融機関業態別の預貸率に着目し、ここ10年ほどの大きな低下や地域ごとの預貸率の大きな違い（当然、地方の預貸率のほうが低い）が示される。読者は地域間の経済格差の違いについて改めて驚くと思う。

第3章は、データ入力から計算方法まで多大な

労力がかかっている研究であり、リレバン導入前後（2001年度－2006年度）の金融機関を比較して、リレバン導入によって金融機関の効率が改善されたか否かを分析している。結論としては、リレバン前後や業態別にみても、金融機関の効率性の違いはあまりないが、地域ごとの金融機関効率性の違いは大きいとのことである。なお、注意すべき点として、本検証方法は各金融機関の財務諸表データを空間座標として、多数の効率のよい金融機関の財務データ座標が形成する曲面を考え、その曲面からコストが高い方向に各業態金融機関が平均的にどれだけ離れているか、という値を計算するというものであり、金融業界で一般的に用いられている実務的効率性概念（経費率が低いとか、一人当たり資金量が大きいとか）とはあまり関係がない。本章の方法は、最初に述べたように、真の効率性を分かりにくくするさまざまな要因をコントロールして分析するための方法なのである。

次に第4章をみると、前半は信用金庫と信用組合に関する戦後史の要約である。後半は、東京商工リサーチの中小企業データを用いて、どのような属性の中小企業がメインバンクとしてどの業態の金融機関（大手銀行、地方銀行、信用金庫、信用組合）を選ぶか、という問題に関する実証研究である。この結果はなかなか興味深い。例をあげ

ると、製造業は信用金庫をメインバンクに選びやすいが信用組合はその反対であるとか、信用金庫は若い企業のメインバンクになるが、信用組合は特にそのような傾向はないとか、である。紙面の問題もあろうが、原因の考察や推論がやや不足していることは残念であるが、逆にこのような結果が生じた理由を読者がいろいろ考えてみるのも意義があろう。

第5章は、地方銀行、信用金庫、信用組合のいわゆる「地域密着」が金融機関の業績にどのような影響を与えるのかに関する分析である。分析のためには、「地域密着」という抽象的な概念を示す何らかの指標が必要なので、著者は各地方銀行、信用金庫、信用組合について、「金融機関従業員数/取引企業数」、および、「メイン取引企業数/取引企業数」という指標を作成した。業態別に行われた分析結果をみると、地域密着が高い金融機関は低いROA、低い利ざや、高い不良債権比率と相関しているようである。このことから、著者は、地域密着戦略にあまり賛成していないようである。なお、入手可能なデータの制約から仕方ない面もあるにしても、このように計算された指標が地域密着を示しているかどうかについてはやや疑問があろう。たとえば従業員について考えると、最近では、非正規職員を年金口座獲得、集金担当、テラーなどに投入しているところも少なくないが、その割合は金融機関によって大きく違うだろうから、正規従業員数のみに頼って指標を作成しても実態とのずれが大きいかもしれない。

第6-8章は、中小企業金融の公的面に関する中級教科書的な概説となっており、新銀行東京、政府系金融機関、ゆうちょ銀行、地方債、信用保証制度や制度融資に関して説明している。ただ、

制度に関する説明のみに終始している感があり、それぞれのテーマ内でのあまり知られていない問題点についてももう少し言及があればと感じた。

第9章と10章は国内地域金融ではなく、欧州の話題である。まず第9章はEUの金融統合の進展、銀行経営環境の変化、そして主要協同組織金融機関に関して概説している。第10章は、多くの種類がある金融市場のなかから、特に地域金融という本書のテーマに関連する各国リテール金融市場（ドイツ、オランダ、スペインの企業貸出市場と住宅ローン市場）について、貸出金利が隣国の貸出金利と連動しているかどうかをみることによって、どの程度市場統合が進んでいるのかを調べている。ここで、読者が注意すべきことは、二国の金利が一緒に上下するというような一般にいわれている金利連動性と本章の金利連動性は異なることである。本章の金利連動性は、二国の貸出金利の変動から、外部（ホールセール金融市場）金利変動に起因する金利変動を取り除いた残りの変動（つまり「みかけの相関」を取り除いた残り）が互いに連動しているかどうか、という概念である。結果としては、みかけと異なりほとんどの貸出市場で隣国との連動性はない、というものであった。ただ、ここでもその背景や原因などに関する説明がやや不十分な点は残念である。なお、係数推定値の一部（スペイン）が異常値で、計算方法に改善の余地があるようにも思えた。

全体的にみると、研究書部分についてはかなりの力作であると評価できる。部分的には気になる点もあるが、研究書はフロンティアを扱うため、多少の問題点の存在はやむを得ないと思う。本書を地域金融研究に関心があるすべての人々に推薦したい。